

# カルシユの足跡を追って

若松 秀俊

◇11◇

## 出会い

(下)



顕彰計画立案にかかわった奥野良臣、白石磷、岡崎道夫、宮田正信の各氏(前列左より、後列は筆者)

その縁者の資料を二人がカルシユが当時の日本をた。毎日、テレビ放送を  
保管していることが分か深く愛し、日本の人を慈見ながら、いや聞きなが  
った。  
日本では広く小泉八雲を惜しみなく生徒に伝え、ひたすら資料のワー  
ルシユの十四年に及ぶ滞このことを何とか広くプロ入力を行った。もと  
が顕彰されているが、カテていたことが分かった。よりことさらに、まとめ  
ルシユの十四年に及ぶ滞このことを何とか広く興味がある人がいたら諦  
在期間からいっても、松日本の人々に知らせたいうどもらおうと思っ  
江や松江高校で果たしたと思っっている。また彼の功績には大きいものがあ  
功績には大きいものがあ日独友好の努力の証(あ料をつづった。  
ると推測された。おそらかし)も明らかにし、友この時期に、調査の手  
中・戦後の混乱期に好発展の礎にしたいと思、この時期に、調査の手  
当たり、彼の足跡を記録している。影を各方面に働きかけて

として留めおくことがで彼の履歴については、みたが、「こんな人は  
きなかつたのであろうとフリーデルンから得た書マン」という冷た  
想像した。それゆえ、彼を翻訳したものが調査に反応に、いつも泣か  
の足跡を明らかにし、故役立った。また、長女メるを得なかつた。この  
ヒテルトとカルシユの旧は自らすべてにわたって、結局  
生徒から得られた直接・かかわらざるを得なかつた。こうして調査とその  
間接の情報と、外務省、宮内庁、文部省および関た。こうして調査とその  
連機関、図書館を通じて、まともに関係するこれま  
得た情報をもとに、ほほの苦勞については、い  
正確に知り得た部分につれ語ることにする。  
いては、記録として留め(東京医科歯科大学  
置いた。学院教授)

# 記録に残す必要性痛感

奥野の四氏と戸屋(こうら)も、元気に過ごしている。カルシユ博士は戦前、旧生徒の経歴などの情報を得ることができた。

松江高等学校でドイツ語、ドイツ文学、哲学のブルクに住む学者であ

このころ、同時に、米語、ドイツ文学、哲学のブルクに住む学者であ

国在住のメヒテルトから教鞭を執っていた。一九九。もう一人はMrs.

は、次々と事実を明らかに四〇(昭和十五年)年からMechtild St

にする手がかりを得るこはドイツ大使館に勤務・Goar(日本名ほし

とができた。その間、彼は、両国の友好関係に尽くこ、一九二八年一月生ま

女が提供するすべての資料を彼女の許可のもとに娘が二人あり、そのう

れで、現在アメリカ合五く四七年)に居住した資料と絵画、松江の写

一カに住んでいる。一九三九年に帰国、翌年に再は十分に話を聞けなかつたが、何回か姉メヒテルト彼の功績を明らかにしたいと思うようになっていた。  
そのなかで、筆者が折しも、シドニーオリ  
独自に調査をした結果、ニピックの時期であっ  
真およびかつての生徒と

文中敬称略